

NPO法人

「畑と田んぼ環境」再生会

「農ある生活を楽しむ」

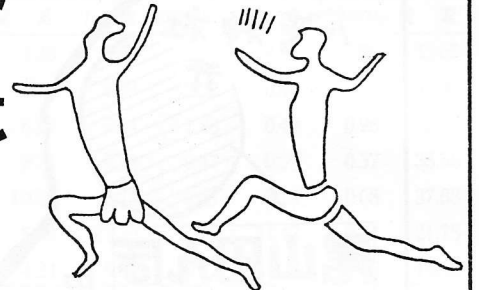
「畑と田んぼ環境」再生会

H22・5・25、会報1号

編集：仲野 忠晴

E-mail:zokuchen@livedoor.com

農ある生活を楽しむジッセンジャーに！



「畑と田んぼ環境」再生

会は、平成十八年に発足しました。この会の原則は①農薬・化学肥料は使わない②草や虫を敵としない③耕運機は極力使わない④自然の循環を考える、というものです。現在、会員は三十八名で、中心となる活動内容は、農家の協力のもと休耕地や耕作放棄地となつて

私たちは、この人たちを「環境自作人」と呼んでいます。私たちがこの活動を始めたのはいくつかの理由があります。そのひとつは、都市化が過度に進み、自然と

触れ合う機会がほとんど無くなつてしまったことへの危惧です。そのため私たちの思考や感性がひどく歪め

られてきているのではないでしようか。実際、年間3万人を超える自殺者やうつ

病の増加などを見ても、私たちの社会が健全な方向に進んでいないことがはっきりとわかります。

そして、この問題の根幹にあるのが、「いのち」よりも「お金」を優先する経済効率至上主義の論理です。

これは、工業製品だけでなく、サービス、そして農業など、現代社会のあらゆるところに広く浸透し私たちの価値観に大きな影響を与えています。しかも、世界

がグローバル化し激しい国際競争を余儀なくされる中、この傾向はいつそう拍車がかかっています。そして、

現在の深刻な環境問題からものはつきりわかるように、この経済効率至上主義の致

命的な欠陥は、生産条件をよくするために生き物の生存条件を犠牲にするシステムのの上に成り立っているところ。したがって、この論理でいくら豊かさを追求して行つても幸せになれるはずがありません。むしろ、やればやるほど自己破壊の道を突き進むことになります。

今必要なことは、様々な「いのち」のつながりを自覚し、人間もその輪の中で生かされているという視点から、生き方や暮らし、そして産業や社会の在り方を見つめ直すことではないでしようか。持続可能な社会ができるか否かは、この感性を育てることができかどうかにかかっています。多くの生き物と触れ合いながら、お米や野菜を育て、それを収穫し料理する。そして家族で味わい、残ったものを土に返す。これは生命の循環を生活の中で体験し日々積み重ねていくこと

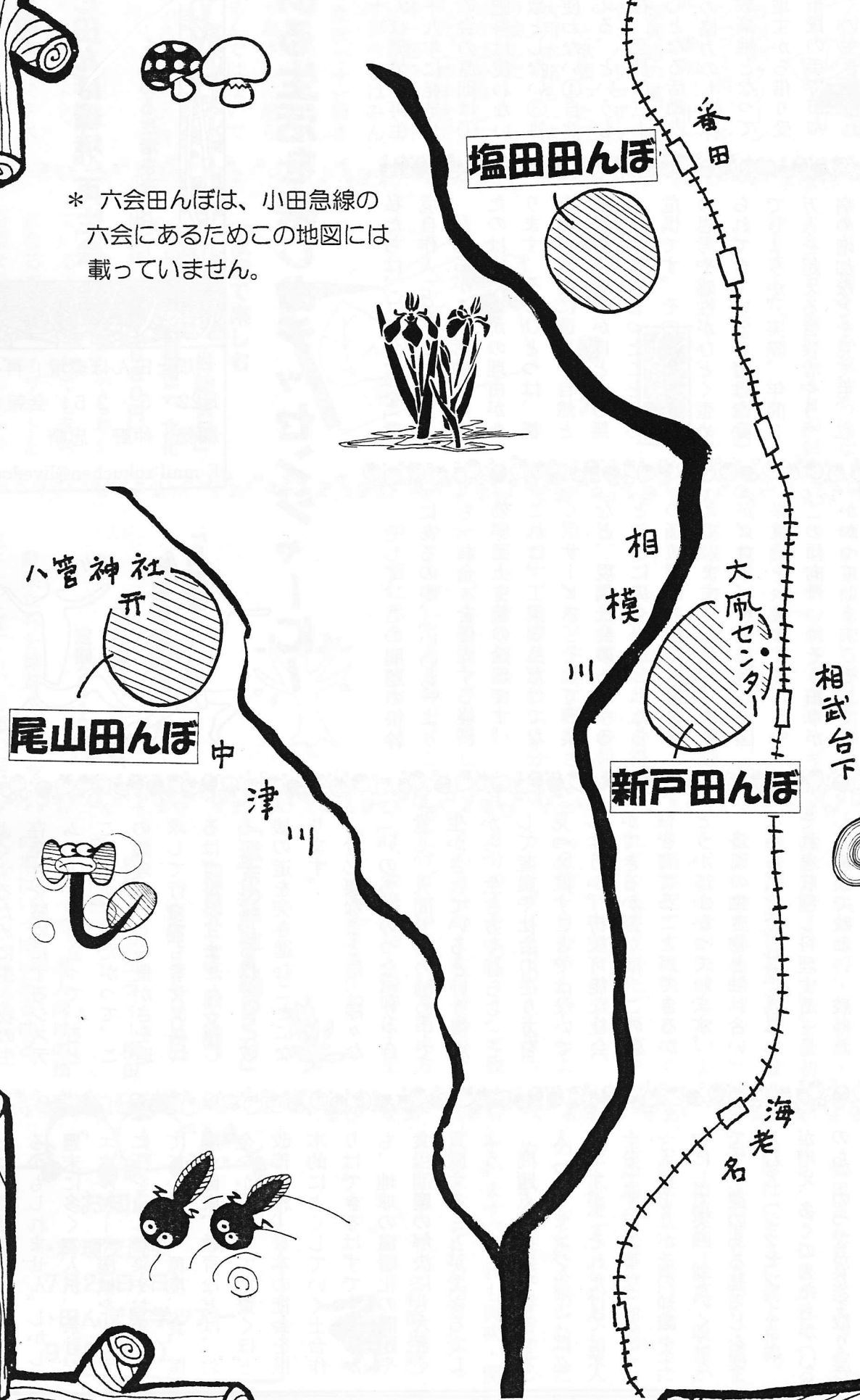
です。田んぼや畑をすることは一見些細なことに見えるかもしれませんが、週末に多くの人が、余計なエネルギーや機械を使わずに汗を流し野菜やお米を育てていけば、環境、食、医療・健康、教育などは、お金をかけなくても驚くほど改善され、日本の社会を根本的によくしていく土台作りはできるはず。しかも、地球の温暖化の問題や食糧問題の解決にも大きく貢献することができでしよう。

問題点の指摘や警告する人（メッセンジャー）は必要ですが、それだけでは不十分です。大事なことは、一人ひとりがその知識を土台にして実践していくことです。農のある暮らしを楽しむ人（ジッセンジャー）が増え、多くの人たちが「いのち」のつながりを取り戻していくこと、これが私たちの心からの願いです。

（仲野忠晴）

田んぼ活動場所MAP

* 六会田んぼは、小田急線の
六会にあるためこの地図には
載っていません。



新戸田んぼ

平成十八年から新戸で初めて借りられた田んぼが、研修田（一反2畝）として使われています。研修スタッフは、仲野、篠崎さん、田島さんの3名で、今年の研修生は、木村夫妻、林さん、今井さんの4名、そのほかに船山さん、山崎さん、原さんが研修後、継続参加しています。現在は、ニコニコ田んぼ（安藤さん、田中さん、5畝）、三角田んぼ（足達さん、佐藤さん4畝）、駅前田んぼ（海輪さん、中山さん、4畝）、07田んぼ（小川さん、安藤さん、稲田さん、1反）、そして、今年からたんぼぼ田んぼ（中川さん家族）で、それぞれお米作りに取り組んでいます。

最近では、近隣の農家に「化学肥料も使わないで毎年よく実るね」と言われるようになりました。少づつ受け入れられているようでエビス顔です。（仲野忠晴）



塩田んぼ

平成二十年の田んぼ研修生で自作人となった、中嶋さん、米田夫婦、佐川さん、吉田さんの5名が、田んぼを貸してくれる人がいないかと探していたら、田名の塩田で縁あつて約1反5畝の田んぼが借りられることになりました。その後、隣の田んぼ約5畝も違う地主から借りられ、合計2反の田んぼとなりました。またその時、理事の篠崎（田名出身）が図々しくも田名の田んぼということで『俺にもやらせて』と名乗り出て、6名が「チーム ソルト」のメンバーとなり平成二十一年から米作りを開始しました。やり方は皆それぞれ思い思いの方法で、耕したり、不耕起だったりです。結果はもの凄く採れたりスズメにやられてさんざんだったり、いろいろでした。二十二年からは中嶋さんが自身の都合でチームから離れられましたが、同じ年の研修生であつた猶井さんと

川上さんが新戸から塩田チームに移り、今年からは新しいメンバーで一年が始まりました。また、今年、「田んぼの中にビオトープを作ろう」ということになった

時、ついでにその上に休み場所も作ってしまえとばかりに、篠崎がチームのメンバーを無理矢理たきつけ、すったもんだしながら四月二十九日に完成しました。中に入って休みますとささる気持ちいいです。みなさんもお近くにお寄りの節は是非お立ち寄りください。（篠崎 亨）

尾山田んぼ



愛川町の八菅山のふもと、近くに中津川が流れるところで「田んぼ」をやっています。

メンバーは、細田さん、田嶋さん、奥村さん、松村さん、この原稿を書いている稲田と、今年から新しく細萱さんが参加しております。地主さんのご協力の下、

メンバーはそれぞれのやり方と工夫で米作りに取り組んでいます。

私個人の米作りの目的は、他のメンバーと若干違つて、幼児園の子どもやその家族の体験学習の場としての「田んぼ」に関わっているわけですが、いつもお騒がせをしまつて、恐縮しております。それでも、メンバーの方々は嫌な顔ひとつせず、むしろ快く受け入れていただいて指導までしていただけるので、本当にありがたく感謝しております。

ここの「田んぼ」は中津川の清涼な水と周りの豊かな自然環境に恵まれ、作業も気持ちよく捗ります。水の入る頃になると、どの田んぼからもカエルの合唱が聞こえてくる日本の原風景を思わせるような場所です。一度、ぜひ遊びに来てください。メンバー一同（時には、サルも）、お待ちしております。（稲田浩一）

六会田んぼ

自然農グループ、パーマカルチャーグループなど4グループで4枚約2反あります。

田島さん、奥村さん、足達さん、田島さんの友人降矢さん、松村友人の田村さん夫婦、松村の7人で田んぼ5畝と隣接する畑約三十平米を使います。

田んぼ5畝は7人で4分割し、それぞれの方法でお米作りです。畑はヘチマやゴーヤでグリーンカーテンを作る予定です。水は6月初めに入ります。今までと異なる環境でお米作りです。

先日、自然農の苗床作り、パーマカルチャーの畑を見学しました。どちらも興味深く今後が楽しみです。（松村婦美子）



会員フォーラム

会員の皆さんの思いや考え、体験したことを紹介するコーナーです。

農のある暮らし

水澤洋恵

私が農業に関心を持つきっかけになったのは、実父の実家が福島農家だった事です。子供の頃、夏休み田舎に行くと、伯父や伯母と田んぼや畑に行き虫と遊んでいました。当時、晴海に住んでいた私にとって、自然の中にいるだけで癒され、将来農業をやりたいと思ったのは小五の時でした。そして今から十五年程前に、雑誌で川口先生と木村秋則さんの記事を見て、「やるならこれだ」と思いました。しかし仕事で忙しく農業どころではありません。ようやく家庭菜園くらいできる余裕ができ、野菜とお米もやってみようと稲の苗を買に行きました。売切れで諦めかけていた時、桜祭で小川さんが稲の苗を売っていました。その時、田植えのお誘いを頂いたのが始まりで、畑の研修を経て、今は新戸で畑をしています。今年で畑を始めて三年目で

すが、一年目は姑の家の前の畑で一人でしていたので、わからないことばかりで、研修で習った事や本を参考にしていました。二年目から新戸の仲間に入れて頂き、周りの畑の先輩方に生の経験の話が聞けるので助かります。

あと、このNPOの良い所は、雑草をはやした農法ができる事。他の所では、畑を借りられても、虫が発生するからと草は抜かなければなりません。とはいえ、私も草刈はします。夏は刈っても刈っても草が生えてくるので、この農法をやめたくありませんが、蛙がイキイキと畑で飛び回っている姿を見ると、草を抜く気がなくなりません。蛙には害虫を食べてもらってますし、私達同様、蛙も住む所が無くなると困るでしょうから。この草や微生物、虫達のおかげで、良い土ができ、害虫駆除され、昨年は美味しい野菜が沢山食べられました。食べきれない分は、近所や友人に配り、とても喜

ばれ、後日いろんな方から野菜に味があるとか、甘かったと言ってもらい、嬉しい上に近所付き合いもよくなりました。又、病弱だった私の体が人並みに近付きつつあるのも良い点です。

畑からの恵み

山崎真弓



私は2年程前から小田原で畑を借りている。山の上であり、海が見渡せる眺めの素晴らしいところだ。畑を借りることにしたのは、体の不調を治すために食生活を見直したからだ。今までの無頓着な食事を改め、なるべく安心して安全な素材を使って手作りを心がけるようになり、「安心安全なものを食べるなら自分で作るのが一番では？」と野菜作りを始めた。

溜息をつくこともある。でも、野菜の出来映えや収穫量が重要ではなく、その過程や付随することも私にとっては大切なことだとわかった。

畑は雑草が生やしつ放しで、枯れてしまわれた野菜が枝になったまま放置されている。

大根の頭に花が咲いている。冬に消えたものが春になって再び姿を現す。野菜の一生を知り、どんな姿に変化するのか観察することが楽しい。虫に驚かされ、草花で季節の移り変わりを感じ、固まっていた心や頭がほぐれていく。体はもちろん、心も元気になる。畑にしていると幼い頃のように「どうして？」が次々と浮かんできく。そして疑問の連鎖から様々なことに関心が向く。食べ物のこと、環境のこと、生きること等色々なものを私にもたらしにくれる。今では畑は私の生活になくてはならない存在になっている。

日本の景色を守りたい

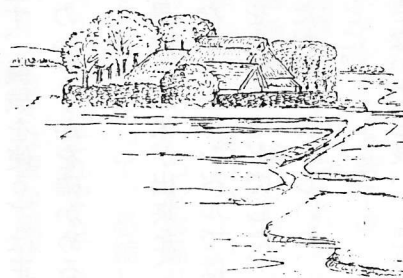
海輪光正

トレッキングにお客さんを案内する仕事を十年以上も続けるうちに気がついたことがあります。その国の景色は代々その国の人々が守り続けてきたものなのだ、ということです。ヒマラヤの山々は自然に昔からあったものですが、山の手前に広がるだんだん畑は気の遠くなるような作業を代々の人々が続けていくことによつて、生まれ、維持されているものなんだなあ、ということです。そこで日本の景色を考えてみたときに思い浮かんだのは、一面に広がる田んぼの景色です。一面の田んぼのかたには緑の山並みが並んでいます。時には見える山並みは雪をかぶった富士山であったりもします。もちろんこの景色も代々のお百姓さんが守り、作り上げてき

たものです。田んぼで毎年お米を作るということは、結局日本の景色を守っていることなんです。自分もいつかチャンスがあったら日本の景色を守る、田んぼというものに關わってみたいなあ、と思うようになりました。そして始めた埼玉での自然農。お借りしていた田んぼの地主さんは田んぼの奥で農家風レストランを経営されています。雑穀等を主体とした身体にやさしいレストランです。来られるお客さんは田んぼで作業している自分たちを眺めながらレストランに行かれます。ということは、お客さんにとって自分たちは風景の一部になっているんだなあ、ということにも気がつきました。そうか、今どき珍しく手で一本一本田植えして、田んぼに入り込んで草取りをして、鎌で稲を刈り、稲架掛けの天日干し、そして足踏み脱

穀機での脱穀や唐箕でのゴミ飛ばし。その作業自体が今では貴重な風景なんだなあということに気がつきました。幸いにも今、再生会からお借りしている区画は駅前田んぼ。電車の車窓から、ホームから、沢山の人に見ても見える環境です。雨の日には箕の傘でも着て作業したらすごく印象的なんだろうが、そこまでは出来ません。それでも、ふと頭に浮かんだ田んぼの風景の中に自分のしていた作業が残っていたら、それは嬉しいことだなあと思います。自分で作ったお米や野菜を食べるという喜びが一番の目的な訳ですが、その副産物である田んぼや畑や自分が風景になる、という喜びも大きなものがあると思います。楽しく作業して、美味しく食べて、日本の景色も守ってついでに、とつてもやりのあることですね。

*文章は海輪提出の文章から本人了解のもとで、抜粋、修正したものです。



ある晴れた日に

勝ち組トマト

細萱理子

ある晴れた日、畑の草取りをしていてふと思った。野菜がどうすればうまく育つか試行錯誤する我々、これはもしか、野菜の策略にうまいこと乗せられているのでは??? 人間という生き物は兎角、他の生物に対して上から目線、というか、地球上で人間が一番優れた頭の良い生物と思いがちで、動・植物の生を利用して我々の生を繋いでいるぐらいに思っ

いるが、実のところ野菜のほうが上手で人間を利用して種をうまいこと保存・繁殖しているのでは???とナス科のトマトやじゃがいもなんかはその冴えたるもので元来、南米原産であるこれら野菜は、人間の味覚に働きかけ、まんまと世界征服。今や、世界のどこに行ってもトマトやじゃがいもは育てられ、食べられている。鳥が種を運ぶといっても、きつとここまで世界の隅々まで広がることはないだろう。そう考えると人間を利用したトマトやじゃがいもはまさに植物界の勝ち組!?

温室栽培やら、最近流行りの工場野菜やらも、どんな気候変動があっても種を保存できるようにと実は人間を操作しているのかも。野菜たちは虎視眈々と世界征服を狙っている。と否定的な思いに駆られたある日のことでした。



農ある生活を行って

田中 健

私は無農薬、有機肥料による野菜作りを行って、約二十年になる。発端は無農薬、有機肥料によるつまみ菜を食べて「美味い、これが本物の味か!」と気づかされたことだ。こんなに美味しいなら皆に、特に子供にも味を知って貰いたいと感じた。現在は収量が少なく、食べて貰っているのは一部の知人に限定されており、理想通りになっていない。今はその延長線上に自作の米作りを始めて一年目になる。銘柄はイセヒカリである。これは市場に回ってなく、NPO会員の海輪さんから分けてもらった。駅前田んぼ四十坪で五十六キロ(反収七俵)の収穫があった。成果は十分満足している。ご飯は玄米で食べていて、美味い。白米は積極的に食べる気にならない状態になってしまった。恐ろしいことではある。粃摺りをしたとき、玄

失敗が楽しさを生む

奥村 貢六



私は小学生のころから農について特に深い関心を抱き、家の小さな裏庭の片隅で野菜づくりを試みたのが始まりでした。しかし、家が農家でないため、その道を断念しました。そして、子どもの独立を機会に長年の願いでもある農の第一歩を踏み出しました。そして、定年と同時に、長い歴史のある神農普及会の影響もあり、市民農園を振り出しに、「自分で食するものは、できる限り自分で作る」とい

うひとつの理念に基づき今日に至っております。その間に数々の失敗がありました。たが、失敗が多いほど楽しみもまた多くなりました。(このようなことを申しますと、農で生計を立てている方々から、大馬鹿野郎と叱咤されるでしょうが)。春夏秋冬、大自然と一体となつて命の続く限り楽しい日々を送っていくつもりです。

最後に私の拙い俳句と短歌を二題

田枯草 分け入る底に

幼子散る

(藤沢湘南田んぼにて)

相模野に

けむりほのかに立ち上り

人陰淡し 秋の夕暮れ

(相模原麻溝畑にて)



田んぼ研修を受けて

中川 博俊

兼業農家に生まれ、子供の頃田んぼの手伝いをした覚えはありますが、あまり楽しかった記憶はありません。昭和四十年代は3ちゃん農業(じいちゃん、かあちゃん、ばあちゃん、とうちゃん)は外に働きに行くのでと呼ばれた時代、なんだか取り残された様に感じていましたから。

不耕起移植栽培に興味があり参加した田んぼ研修、第一の目的は、米農家の常識(耕す、防除する、肥料を施す、機械を使う)は正しいのかどうかを確かめる事でした。

結果は お米が出来た、出来なかったのレベルでは期待を上回るほどでした。とれたお米はおいしいね、ほんとに。

耕さないでも良い、肥料はいらない、薬もいらない、機械もいらない、時間はちよつと要る、多くを望まな

ければ気が抜けるほど簡単。今までの常識とは何だったんでしようか、子供の頃楽しくなかったと感じたのはこの固定観念(決められた事をするだけ)のせいだったのかも??(もちろん出荷米として考えると話は別なのだろうが、)

でも一つだけ、不耕起田植えはちよつと大変でした。ね。シビレました。自然農の本に修行の様だと書かれている事に納得です。



雑草の効用

慣行農法では、野菜や稲以外の植物を競合相手とみなし、作物の養分を奪うもの、生長を邪魔するものと考え、そのすべてを取り除くことを原則としています。しかし、コンパニオンプラントの例からもわかるように、実際はお互いに助け合うものも多くあります。また、自然を観察してみると多種多様なものが共存・共栄していることもわかります。このことから考えてみても、雑草は作物の敵ではなく、実は恵みであることもとわかるのではないのでしょうか。ですから、思い込みで雑草のマイナス部分にばかり見ないで、そのプラス面を発見していくことが「生き物との共生」ということを考えていく上でとても大切なことになります。

① 雑草は、畑の地力を教えてくれる

畑や田んぼを始めるときに大事なことは、この土が

どれくらいかの地力を持っているかを知ることです。そのことがある程度わかれば、肥料を入れ過ぎたり、足りなかつたりすることがなくなるからです。そして、このことを教えてくれるのが、実は畑に生えている草なのです。一般的には単子葉類は痩せ地に、双子葉類は肥沃地に繁殖します。例を挙げると、畑では、ススキ、チガヤ、メヒシバ、ハマスゲの痩せ地草種から、ハハコグサ、スギナ、ヨモギ、オオバコ、コウブシの中間草種、スベリヒユ、アオビユ、ハコベ、カラスノエンドウ、オオイヌフグリ、ホトケノザ、ミミナグサの肥沃型草種になっていきます。

酸性に弱い雑草
ハコベ イヌノフグリ ホトケノザ コヌカグサ ノゲシ コメツブウマゴヤシ カラスノエンドウ
酸性にやや弱い雑草
ナズナ コニシキソウ スズメノカタビラ レンゲソウ ザクロソウ ヘラオオバコ エノキグサ
酸性に強い雑草
カタバミ アカザ カヤツリグサ オオバコ ギシギシ イヌガラシ
酸性にかなり強い雑草
スギナ シロクローバー ニワホコリ イヌタデ スズメノテッポウ イヌビエ
どこにでも生える雑草
ススキ メヒシバ ヨモギ チガヤ クズ ハハコグサ

② 雑草は、畑に合った野菜を教えてくれる
福岡さんの「無Ⅲ（自然農法）」という本の中に、「畑に生えてくる雑草を見て同じ科の野菜を作付けする」と書いてあります。具体的

有機質肥料の成分（有機質肥料成分表より） 単位：％

有機質資材名	窒素	リン酸	カリウム	カルシウム	マグネシウム	炭素
コメヌカ	3.20	6.68	1.51	0.38	2.36	33.65
大豆油粕	7.72	1.69	2.22	0.40	0.48	32.95
菜種油粕	6.22	2.84	1.38	0.49	0.96	35.72
魚滓	9.75	8.54	0.47	0.09	0.37	35.53
肉滓	10.23	2.47	0.41	3.19	0.08	37.68
蒸製骨粉	5.30	21.30	0.12	51.42	0.74	21.75
カニガラ	4.24	5.34	0.22	47.33	1.83	14.42

主な雑草と緑肥の栄養成分 単位：％

植物名	窒素	リン酸	カリウム	カルシウム	マグネシウム
ギシギシ	3.82	2.82	22.46	3.41	1.46
フキ	2.93	1.91	21.12	5.69	1.80
ヨモギ	4.10	2.98	30.68	4.13	0.69
タンポポ	3.53	2.61	21.00	5.10	0.99
アレチノギク	3.43	3.06	13.48	10.91	1.20
カミツレ	3.38	2.98	19.74	7.77	1.31
オオイヌノフグリ	2.08	1.55	14.77	4.60	1.26
クローバー	4.34	2.21	17.77	7.72	1.31
アルファルファ	4.58	2.62	15.30	4.55	1.03
ムギ	2.18	1.65	13.01	1.28	0.54

には、タンポポ、アザミ、ヨモギのキク科の草が生えていれば、春菊やゴボー。ナズナ、ぺんぺん草などの十字科の草が生えていれば、大根、カブ、白菜、タカナ。イネタデ、イタドリなどのタデ科の草が生えていれば、ソバ、ほうれん草。カラスノエンドウ、クローバーなどのマメ科の草が生えていれば、大豆、小豆、ソラマメ・・・など。また、土が酸性かどうか草が教えてくれます（表参照）。

③ 雑草は、土を肥沃にし、生態系を豊かにしてくれる

草は根を密に張り巡らしながら土を耕し、枯れると微生物に分解され養分となります。そして、この根穴が地中深く空気を送り込んでくれます。しかも、雑草には、あまり知られてはいませんが、多くの栄養分が含まれています（表参照）。

また、雑草を生やすことで畑に多彩な環境が作られ、さまざまな微生物や昆虫や小動物も増えていきます。そして、これらの生き物の営みが積み重なって土を肥沃にしてくれるのです。その上、多様な生き物が生態系を豊かにし、病害虫などの特定の生き物が優先して繁殖することを抑制してくれます。

雑草がもたらしてくれる豊かな恵みを見つけないながら農ある生活を楽しんでいきたいですね。（仲野忠晴）



クリーンキャンペーン

終わる



四月十一日恒例クリーンキャンペーン(ゴミ拾い)を行いました。参加二十一人！新戸畑周辺の道、水路はキレイサツパリコザツパリ、ちよいと欲張った三角田んぼの大用水路も「清流！」になりました

四十袋のゴミは分担して持ち帰りました。(昨年までは篠崎さん等一部の人が片寄ったのですが今年はみんなで負担した訳です)皆さん大変だったと思います。沢山持ち帰り奥さんに怒られた方もいるんじゃないでしょうか？

ゴミは集めるよりその後が大変ですね。

今後は市に一括処理して貰うことも考えましょう。作業後はいつも通り焚き火でランチ。玄米ライスカレーと皆さんが持ち寄った山

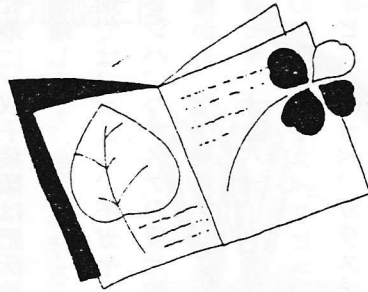
海の珍味山盛り大宴会になりました

こうして宮脇さん流に言う「清々しい気持ちになった」ゴミ拾いの1日が終わりました。

(T.M.担当田島)



本の紹介



「家族で楽しむ」

自給自足

(新田穂高、竹嶋浩二、文化出版局、定価1680円)

自給自足を少しでも考えている人には、とても参考になる本です。イラストと簡潔な説明でとても読みやすく、内容は、野菜や米・

麦作りはもちろん、うどん・ソバを打つ、パンを焼く、味噌や納豆を作る、植物から油を絞る、自家製茶ミツバチを飼う、鶏やヤギを飼う、チーズ作り、キノコ栽培、竹を使いこなす、海辺での自給生活、布を織る、かごを編む、小屋を立てる、火を起こす、水を得る、太陽光発電、水力の利用・・・など、盛りだくさんです。あとがきに「自分で何かをするのは楽しい、一緒にやるともっと楽しい」と書いてあるけど、この一言に尽きますな。



「自然流」

家庭菜園の作り方

(徳野雅人、洋泉社、定価2415円)

野菜たちを雑草や虫と共生させて育てる、普通の家庭菜園の本には、書いてな

ない内容です。徳野氏は、このことを写真とイラストを使って話をしてくれまします。しかも『無肥料・無耕起・無除草』という方法を最初から薦めないで、「初めは最低限の堆肥を使って・・・」と、初心者が出し方しないよう順序だてて説明をしてくれています。また、野菜や菜園の作り方だけでなく、『全部、自分のものとしよう』とせず、3分の1を虫に、3分の1を土に、そして残りの3分の1を自分がいただけばいという考え方は、栽培方法と同時に人生哲学でもあります。



「週末の手植え稲づくり」

(横田不二子、農文協、定価1500円)

横田さんはエライ！横田さんは最高！

なぜって、素人向けの畑の本はいっぱいあるけど、素人向けの田んぼの本はこれ1冊しかないからです。

農をするにあたって主食の米作りができないでは、その楽しみも半減しますよね。横田さん自身素人であるため、ここに書かれている内容は、まさに素人目線。田んぼの借り方から、種まき、田植え、除草、収穫から精米まで、痒いところの手が届く充実した内容になっています。しかも、素人の好奇心と先入観がないため、いろいろなことを試しています。これも興味・関心をそえられる内容になっています。

(仲野忠晴)



お知らせ

・料理交流会
7月25日(日)
・田んぼ見学ツアー
9月5日(日)

